

波々矢物語：文苑

著者	槇雨
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 6
ページ	2 8 - 3 6
発行年	1902-12-21
URL	http://hdl.handle.net/2298/5413

文苑

波々矢物語

『一』

檣 雨

大神の言よざしかしこみて、螢なす光る神、蠅なす荒ぶる神ありとふ、葦原の瑞穂の國を鎮めむとて、今しも高天原より降り行かむとせる稚彦は、暫時とて安の河原の汀なる、とある大巖の上に佇めり。

大神の給ひたる麻迦弓左手に握りて、右手には波々矢を手挟みつ、遙のあなた、黒雲逆巻く下界を見下したる彼の眼の光の、すさまじさよ。
薔薇なす彼の唇は、遂に綻びぬ。

大神の詔に反きたる菩比よ。汝はるも何故にか歸り來ざる、珍らかなる寶にや酔ひたる、美はしの少女にや迷ひたる。大神の詔を受けむものは、何事を措きても、果さでは已むべからぬものを。

憤ろしと踏みつくる岩根は、さながら動くばかりに覺えつ。頸に懸けたる統は、其度毎にさやかなる音を立てぬ。

千よろづの寶にも我はつゆ迷はじ。百千のまがつみをも我はつゆ恐れじ。

聲音も姿も、げに雄々しげなり。

いざ打立たむと、彼は手をのべてさし招けば、あたりには漂ふ白雲の一片は、大岩の下に浮びよりつ。

さらばと打乗れば、雲はたのづとゆらぎ出で、遙かなる下界をさして、下り行きぬ。

雲は今しもとある山の頂にかゝりぬ。稚彦は早、下界につきたるなりけり。彼は下り立ちぬ。雲は已に、使の旨を果して空高う、飛び行きつ。彼が行手は、今明らかになりぬ。彼はつく／＼とを眺めやりつ。緑なす青山のこゝしき、限なき大野の目も遙かなるを、ゆゑしと覺けしなり。

げに豊葦原の瑞穂國なりけり。如何にみづ／＼しう、美はしき國原よ。吾が長と仰ふく大神の御裔の、しろしめさむ所、正にこゝなるべし。とく此處の醜草薙拂ひて、御任の旨果さむ。

諸手に握れる弓矢を見つめて、彼は首肯きつ。紅の面わ、うごめく眉根、げに勇ましの姿なりけり。いざと彼は歩みをうつしつ。麓の里に出でむとてなり。

『二』

時しも世は秋ありけり。こゝしき山路全く盡きて、たゞりゆく川添路の、櫨、楓の、唐紅もみぢせるを、をかしと眺めながらも、醜人あらは疾く殺してむ、荒神あらば打とりてむと思ふ心は、しづし胸を去らざりけり。

と見れば、楓の樹のいど大きなが、川の面にさしかゝりて、さながら燃ゆるばかりの色を、水に綾なせる汀に、一人の少女の、玉なす腕もあらはに、丈にも餘れる黒髪を、水にしたして、腕やうの物以て水を吸みあげつゝ、洗ひをるがなりけり。八百萬の神の、神集ひます、高天の原に、精も、雄々しくも、生ひ立ちて、未、戀てうものを知らざりし稚彦も、あでやかなる此姿を見入りては、我知らず胸のときめくを覺ぬつ。足はいつしかと、少女の方に運ばれぬ。

腕どる手もたゆめに、注ぎかくる水は、房々しき黒髪を、いやが上に染めなすかと覺て、眞白き

膚の玉を展べたらむと見ゆるに、暖き秋の日影の照せる、譬へんものなしと稚彦は思へり。何事にも心つかで、只管髪を洗ひぬたる少女は、ふと、水の面に映れる、あやしき姿を見て、驚きて首をもたげつ。目なれぬ雄々しき男の、吾がかたへに、ほゝ笑みつゝ立てるを見て、思はずも退きつ。男の姿つく／＼と見つむる面わの、やがても紅の色を帯びしは、影見ぬ戀の征矢やうが胸を射貫きたりけむ。

言ひ出つる聲も滞り勝ちに、稚彦は先づ口を開きぬ。

我は今し天つみ國より降り來し男なり。ここしき山路、遙かなる野邊のさすらひに、いと／＼渴を覺えて、堪へがたきに、我に一杯の水を恵みね。

面をいよよ赤らめて、少女は言葉は無くて、只手に持てる椀もて、水をすくひあげて、男に差し出しつ。

否とよ少女、其椀の水を飲みむは、我望にあらず。いましが掌を椀にしてころ。

男の聲ははや朗になりつ。かゝること言ひ出てゝ後は、ためらはぬぞ人のならひなりけらし。

暫時とまどひし少女は、つと進み寄りて、紅葉映れる小川の水を、玉なす掌の椀にすくひとりつ。言葉はなくて、さし出せる諸手の打振ふに、入れたる水の面は、風なきに漣を立てつ。

進みよりて、之を飲み盡せる稚彦の顔、るを瞬もせで眺め居たる、少女の面わには、にこやかなる笑を湛へつ、再、互に相見し瞳の輝き。あはれ、二人の戀は、早、成りにけるなり。あれ、此少女の掌の水をしも、誠の戀のうま酒とや言ふべからむ。

かくて、心の解けあひたる二人は、互に其思ひをあかして、行末長う奥住の盟を結びつ。稚彦は、

あやにかしこき大神の御任も、全く忘れ果てけるなり。稚彦は、少女にろが家路に誘はれつ。道すがらの女の言葉に、彼女は大國主の娘、下照姫なることを知りて、大神の詔を思ひ出でつ。如何にせむと驚き惑ひしも。此の女の、うるはしき姿と、あつき情に、變はらじと結びし河邊の盟を、破らざりけり。かくて二人は、共住の樂を味ひぬ。

『三』

星流れ月めぐりて、高天原にも八年の春秋を過ぎぬ。ある日、天照大神、高御產巢日神、八百萬の神々をまつめ給ひて、こと問ひ給はく、

葦原の中國を鎮めむと遣はせる天の菩比の、久しく歸り來ぬに、ろをしらべにと、天の稚彦をつかはしてより、早、八年の春秋を経ぬるに、つゆ音づれなきはるも何故ぞや、とく我いつくしき子らを下して、かの國のあるじとなさむと思ふものを、かくてはるもいつかは我思を果すべき、

言ひ甲斐なき稚彦等のねこなひを、少なからず憤り給ひけむ大神の面は、少しく紅を帶ひ給へり。大神の仰畏める諸神は、暫時互に顔見合せぬ。御心のうち思ひはかりて、げに憤ろしの稚彦等と、思ひたれはなるべし。

何事につけても、思に長けたる思金の神は、暫時首を傾けてありしが、やがて其白金なす八束の鬚をひぬりながら、

雉ころその御使にはよからめ
と言ひ出でぬ。

げに漂ふ雲の舟にたよらずとも、一度ろの翼をあやつらば、直ちに百千の山川を越えて、飛ひ行く

べき此鳥こそ、かゝるみ使にはふさはしものなんめり。
さなり。さなり。

と大神は、喜の波を面に湛へて、其言葉に従ひ給ひぬ。

大神の御許うれしう、思金の神は、つと立上がりて、やがて其の雉を、其處へ案内しつ、
雪ども見ゆて翼の眞白きに、紅の雞冠こさかの大きなる、黄金なす嘴、輝やく眼、げにをゝしう、けぢか
き姿なりけり。

雉は大神の御前に跪きつ。

此姿を、嬉しと見させる大神は、嚴かなる御聲もて、之に宣り給ふ。

汝も知るらむ如く、天の稚彦、葦原の中國に下りて茲に八年を経ぬれど、未、歸りこず。今汝を遣
はして、そのありへし様を見せしめむとほりす。汝行きて、稚彦に問はむ状は、汝を葦原の國に遣
はせしものは、其國の荒振神どもを平げむとなり。なほ八年に至るまで歸らざると、我宣りにきと
傳へよ。必かまへて、あやまらず、使の旨を果しぬ。

仰、かしこみぬど、幾度かぬかづきたる雉は、やがて大前を罷り出でつ、ふく秋の夕風に、翼を心
地よう展して、いざと飛び立てる彼の姿は、やがても雲幾重のあなたに見ゆすなりぬ。

四

あはれ我妹子、なれど相住みしより、かゝるなれば早、八年も過ぎにけるよ、げに早きは月日なり
けり。されど、其間の殊に短う覺えしは、永久とほに變はらぬ、なれが情の故なりけり。

今しも秋の收穫とさめの業を終へて、歸り來し稚彦は、端近う坐りながら、遙かの山端に、棚引く夕霧の

ひまより、はの見ゆる紅葉の赤さを、うるはしと眺めながら、かく言ひ出でけるなり。
さなり、我春。八年の昔の川邊の契、とはに變らで、いと樂しくも、住みこしたる月日の、如何に短かかりしよ、かくて又、かの常盤の松の千年をも、其に住みてむ
苔ふる下照姫の聲も、いとたのしげなり。

されど我妹子。吾は常に言ふらむ如く、大神の畏なき御任を受けて此國に下りこしものなるを、を果さで、かくてもはかなく過しつることの愚かさよ、さりどて、今より如何で歸りて、大神にかへりこと申さむ面あらむや。あはれ如何にしてまし。悔ゆる心の胸に迫りこし稚彦の面は、遽にまればしげの色となりつ。されど又此やさしのよろし女を、如何で捨て行くべきと思ふめり。
此言葉を聞く毎に、悲しむは下照姫なりけり。春の憂ひ給ふは、皆我身故と思へば、胸もつぶれぬべし覺て、慰めむ言の葉もなくて、唯俯くのみなりけり。

いよよ悲に沈み行く二人の姿を、かたへに眺めし天の探女は、わかしげの聲して、彼が石船あやつりつゝ、高津に着きけむわかしのを、語り出で、二人の心を慰めむとしつ。其物語の素かしさに、やがて、彼等の心にかゝれる憂の雲は吹き拂はれて、三人は又新らしき、物語を始めぬ。折から、秋の夕風を翼に切りつつ、一羽の鳥の、門なる楊津楓の梢に止りぬ。之なん大神の御詔のまに、下りこし雉なりけり。

三人は等しくるを見やりつ。西の山端に落ちなんやせる夕日影を浴びて、此方を見下せる其姿の、たどしへなく、神々しくぞ見ぬし。

雉はやがて聲高らかに大神の詔をのべぬ。うまし少女と共居せる稚彦を、さながら、嘲りたらむ様

に見やりつ。

稚彦は驚きて、暫時は首も揺げざりき。何事も知らぬ探女は、此鳥は鳴く聲いと惡し、疾く射殺

してむと、彼の眞迦弓、波々矢を執りて、稚彦に渡しつゝ、いざ疾くと勸めて止ます。

たはけなさに畏みたる稚彦は、暫時ためらひしが、若し此鳥の歸りて、大神に返事申さんには、如

何ばかりの報か來らむと、たち畏れて、此鳥よも返さじと思ひ定めて、探女のさうげし眞迦弓に、波

々矢打番ひつゝ、わななく腕を引絞めて、切つて放てば、過たず、其矢胸より通りて、雉は敢なくも

、稍より倒になりて落ちにき。巧のわざよとをうな等の稱ふる聲を物憂けに聞きすて、稚彦は、落

ちたる雉をさへ見やらで、廣き胸をなでつゝ俯きぬ。人には言はぬ苦みや、そこに蟠らむ。

るの波々矢、空高うひた飛びに飛ひて、はては雲間に見えずなりぬ。

『五』

遽に論ふべき事ありとて、高御産巢日神は、天の安河の河原なる天照大神のみもとに、もろくの

神たちを集めつゝ、何事にかと犇めく神々を見やり給ひて、高御産巢日神は、手に持たる白羽の征矢

の血汐にそみたるを示して宣り給ふ様は、

こは、先づ年、稚彦ををかの國鎮めに遣せる折、大神より賜はりし波々矢なり。其矢あやしくもか

く血糊にしみて、今しも我もとに飛び來ぬ。ろは稚彦のしわざたらむこと明らけし、さるにても、

ろも如何なるものをか射とめたりけむ、今神々にたつねむとするは、彼の心のよしあしなり。諸神

如何なもひ給ふ。

さなり、神々の内にても、殊に力すぐれてをふしき稚彦なれば、必ず荒振神と戰ひて、ろを打どめ

しならむ、彼の心の正しきはなぞ論ふに及ぶべき。

と一人がの給へば、かたへなるが、そを遮りて、

あらず、あらず、八年になる迄も歸り來ぬ稚彦の、なぞさる、勳を今更立つべき。彼は必、かの御使の雉をや射たりけむ

と答へまつる。一人がそを宜なりとの給へば、他はあらずと争ひ給ふ、

高御産巢日神この様を見やり給ひて

諸神の言の葉いづれも理あるやうなり、いづれをよしとわき難し、徒らに争ふも詮なし、我今、稚彦、若し大神の御詔のまに／＼に荒ふる神を射たらむには、此矢彼に當るな、されど、若し惡しき心もて、かの雉など射たらむには、此矢飛行きて彼に當りねと祈りて、元、飛びこし所より投げ返さんは如何に、との給ふ。

此かしこき仰に誰かはうべなはさるべき。諸神は皆、さなり、さなり、との給ひぬ。

産巢日神は、即ち、その言葉の如くに、し給ひぬ。波々矢は再び下界をさして飛び行きしなり。

『六』

昨日雉を射とめてより、悔と憂との思ひにみちてとかく沈みかちなる稚彦は、辛くして今日新嘗の御祭もたこなひつ。沈まむとする天津日のみかげを仰きながら、端居してまろびぬたり。

下照姫は、その夫なる人の昨日よりいよく、冴々やらぬ面々に暮せる様を見て、何とはなしに、其心の中をうかがひ知りつ、其眼より玉あす涙の、溢るるをばね止めざりき。又姫は、いと遙けきみ

室にありといふ、御國の主なる大神の、如何ばかり我背をいきよはし給ふらむと思ひめを盡しては、
 やがて其報の來らむことの、うら恐ろしくて、小さな胸には、思のかずく、包みぬばかなき
 けり。折から門なる楊津楓に、夕の嵐のすさまうさわよと見上ぐるに、あらず、あらず、うは
 風切る音のすさまう、かの白羽の征矢の飛び來て、彼がいとしの夫の稚彦が、胡床あぐらにねたる高胸
 、したゝかに射通せるなりけり。唐紅の血はあたりを高う飛び散りぬ。稚彦は聲をもたてず、死に
 はてしなりき。

この有様を見たる下照姫の驚き如何なりしか、しばしは、さながら夢見し心地して、言葉も無くて
 いとしさうの背の骸を見守りしが、やがて現にかへりて、嘆き悲むこと限りなし。尊きいとしの人
 の、かゝる姿となりしも、皆我爲めと思ひては、をうな心のいかで嘆かであらむや。彼女の悲ふ聲
 の天の原まで聞えたりけむも、げにまことなりけらし。

かくて稚彦は失せぬ。彼は樂しき戀に其身を犠牲えとなしつるなり。あはれ、神代より、樂しく又の
 らきものは戀なりけり。

萬葉三、久方の天の探女の石船の、なてし高津はあせにけるかも

(をばり)

